
Gundam Divine **第二部** Adams Children

ダビデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G u n d a m D i v i n e 第二部 A d a m s C h i l d
r e n

【Nコード】

N 1 3 9 7 D

【作者名】

ダビデ

【あらすじ】

第一部から数年後の未来。地球という新しく懐かしい故郷に人々はなれはじめていた。そんな中、前戦の因縁が悲劇を巻き起こす。

プロローグ

ガンダムデヴァイン第二部

兄弟の反乱

プロローグ

あれは三年前の出来事だった。三年前と叫びたなら、もちろん、帝国が起こした、全宇宙を巻き込んだあの戦争の、末期だ。この出来事は奇跡的に大破されたMSから生還し、敵の戦艦に潜入したときに起きたことだった。帝国軍は大急ぎで地球から出たからな、ばれずに戦艦に入り込むのはわけが無かった。だが俺は偶然にも自分を地球で救ってくれた人間を作った研究員たちが乗っていた戦艦に乗ったのだ。俺が乗ったのは戦艦というよりは、帝国軍の兵士などが乗っていない非戦闘用艦に乗っていたのだ。その戦艦から俺は見た、白いガンダムが黒いガンダムを抱えたまま古い戦艦の残骸に突入し、爆発が起こった後その中から出てきたのを。そしてその時点から帝国軍の敗北は決定していたことにも気づいた。その戦艦は最後の戦いには一番後ろで見守り、負けたことがわかるとすぐに降伏のサインを出した。無論乗っている人は捕虜としてつかまり、運よく俺を知っているやつがいたため、勘違いされて一緒に捕虜扱いされずに済んだ。出来事というのはそのとき起こった。

「なんで研究員が特別な扱いされてんだ？」

俺がこの質問を聞いたのは、後に英雄と呼ばれることとなったルク・コナーであった。

「よくわからないが、お偉いさんたちが、彼らに用があるらしくてな。」

俺にはこの事が理解できなかった。少なくとも俺が知る限りでは宇宙連邦軍は自由と平和を重視する国々によってなるひとつの軍隊で、非人道的な実験などを平気で行う帝国軍から出た研究員は一番許せない人たちであるはずだ。彼らは、もともと反抗的な帝国の人民を

拷問に近い方法で洗脳し兵士として利用してきたのだ、ほかの捕虜よりもいい扱いがされていいはずが無かった。

そんなことを考えながら難しい顔をしている俺に、一人の連邦軍兵士が近づいて俺にいった。

「このことは軍事秘密だ、決して他言するなよ。」

やはりな。だが俺はその兵士に自分の本音など言えなかった。さまざまな方向から銃を突きつけるかのようなきつい目線を感じた俺には本音が言えるはずが無かった。

「・・・わかった」

自分に降りかかっていた視線は一斉に無くなり、目の前の兵士は離れた。これを見て俺の隣にいた男は俺に話しかける。

「よくやった、それでいい、デビッド。」

だが俺は悔しかった。何か、よくないことの始まりを目の当たりにして、何もできない自分が。

「お前はこれからどうするんだ？軍には入りたくて入ったわけじゃないんだろ？」

隣に立っていたその男は軽いため息のあと、俺の質問に何気なく答えた。

「おれは戦う前にやっていたことをやるさ。学校の先生をな。」

「そうか、俺はやはり、このまま軍に残るぜ。理由は、わかってるな？」

なんとなく彼のほうを見た俺を彼は見返ししっかりと言った。

「ああ、しくじるなよ？」

「できる限りにことをするつもりだ。」

そのときであった。ルークと彼が立っていた近くにあった窓をデビッドにとって見覚えのある戦艦が横切り始める。

「んじゃあな、俺はあつちに戻るぜ。お前の故郷はコロニーアメルニアだったな？」

「ああ、そうだぜ。」

「またな、ルーク。」

「ああ、元気だな、デビッド」

そして、彼とまたあったのは数年後のことだった。

ブラト・・・数ヶ月ぶりに戻る戦艦の中はどう変わってるか？あのくそつたれた船長はまだしぶとく生きてるか？地球での革命の際、俺の考えを実現してくれた恩は忘れないぜ。

「・・・ふん、生きていたのか。なかなかしぶといじゃないか。」
変わらない顔で彼はいすに座っていた。

「はっ、人の事言える立場かよ。」

俺がブリッジに入ってまずあったのはこの会話であった。

その後、その会話がうそのように、デビッドは人生最大の歓迎を戦友たちから受けた。

「俺はてつきり死んだと思ってたぜ！」

「俺は信じてたぜ、まだ生きてたってな！」

「何はともあれ生きていて何よりだ！」

「ああ、命あってこそだぜ！」

まったく、こいつらは。戦争が終わって、うきうきしゃがって。前この部屋にいたとき、生きてる感じがするやつなんて、一人もいなかったのによ。

「ああ、命あってこそ、戦争の終わりを喜ぶことができるものだ。だが俺の命があるのもお前らのおかげだ。みんながみんな支えあってこそその喜びだ。この日を、これからにも忘れずにな！」

俺はこんなことを言っていたが、心の中には確かな不安があった。だが、俺はあえて、仲間の前で伏せた。

第一話　The Story of the Twisted

ピツ・・・ピツ・・・

最初に耳に入ったものはこの音であった。まったくの闇の中、体感した感触は頭の横から来ていた。私が始めて感じたものは音だった。次に聞いた音は最初の機械音とは違った。

「ビルツォ博士、彼の心拍数は正常です。カルテを見る限りでは唯一の問題は栄養不足でしょうが、今栄養剤を与えますので大丈夫でしょう。」

次に感じたものは痛みだった。正確に言うと、右手の付け根に小さく刺すような痛みがあった。痛みに対して体が反射的に反応しようとしたがほとんど動けずにいた。

「そうか、私は今日はもう帰る。適当なところで切り上げてくれ。」

「いいんですか？ やつとうまくいったのに・・・。」

「いや、これから忙しくなるからな、私たちの体力も養わなければいけないというものだ。」

「そうですか、わかりました。」

音には仕組みがあった。音には意味があった。それを理解することはできなかったし何がその音をだしていたのかもわからなかった。目を開けることはできなかった、だが閉じた目でも光を感じることができる。しばらくして、まったくの闇がまぶたを覆うのがわかった。そしてその後余り時間がたたないうちに眠気に支配された。

・・・

目が覚めた瞬間、前回起きてた時全身を覆ってた感覚は無かった。変わりに、目をあけることができたし、体がいうことを聞いた。だが今度は別なものが動きを制限していた。目を開けてそれを見てみると自分の手足は座っていた椅子にしっかり固定されていた。右手には点滴もうつてあった。目の前にはまた、白い服を着たものたちがいた。

「さてと、目が覚めたところで学習装置を取り付けてくれ。」

突然、一番近くにいた人が自分の頭になにやら硬いものを取り付けた。つりつけられたら早速映像と音声の流れ始めた。

「これはどのくらいの時間で完了するものですか？」

「三日もつけていれば十分だとさ、まったく技術の進歩には恐れ入る。もっとも、必要の無い知識は与えてないからな、短時間で完了するのはそのおかげかもな。」

私は混乱していた、目の前にあるものがまったく理解できなかったからだ。しかし、私はただ呆然と見続けた。しばらくして、すべては真っ白になった、何も感じず、何も聞こえなかった。寝てるとも、気を失つてるともいえない状態であった。

三日がたった、頭についていたものは外れた。外れた瞬間、まるで溜まりに溜まったエネルギーが解き放たれるように、私は言葉を理解し、物の名前を理解していた。私は、初めて自分で口を動かした。
「・・・学習・・・そうち」

そういいながら自分の頭から外された機械をみた。

「どうやら成功したようだな。知識さえあれば、口を動かすのもそのうちなれるだろう。」

私はなんと、目の前の人間の言っていたことも理解できた。私は早速目の前の疲れた男たちに質問を投げかけた。

「あなた・・・たちは？」

しかし、なれない動きにはいささかぎこちなさが、当然ながらあった。

「お？早速質問か、私はマコヴだ。よろしく。」

そういうと自分から機械を外した男は手を差し出した。私は理解もせずにもその手の中に自分の手を入れた。そして握手をしながらもほかの人たちも見た。

「ああ、彼女はスズキ博士、彼はミラー博士そして、彼がミノフスキー博士だ。」

そっぴいながら彼は私から見て左から順番に後ろに立っていた人た

ちに指を刺していた。スズキ博士はまとまった茶色の髪、ふちのある四角いめがねと年季の証である小じわがあつた。そんな彼女は冷たい目線で私を見ながらコーヒーをすすっていた。ミラー博士は背が低く、丸い感じの男で、髪の毛の生えていない頭とたくましい白髪の毛のひげが目立っていた。ミラー博士は椅子に座って頭を抱えながらこつちを見ていた。

最後にミノフスキー博士は、マコヴをのぞく三人の中で一番若く見えた。髪の毛は白髪交じりの黒い髪、背は高めで体はしっかりしている感じだが顔はいかにもまじめそうな感じであつた。三人の中で唯一彼は明るい表情であつた。そんなミノフスキー博士が私に話しかけてきた。

「気分はどうだ？」

「良いとも悪いともいえません」

「そうか。」

すると、まるでこの会話がきつかけであつたかのようにスズキ博士とミラー博士がミノフスキー博士に後ろから話す。

「私たちはこれくらいで帰ります、私は他にもやらなければいけないことがあるし、ここからはあなたの分野だし。」

「私も同感だな。帰らせてもらつよ。」

そんな二人にミノフスキーは返事を出す。

「ああ、かまわんよ、ここまで付き合ってくれすまない。何かあつたら連絡するよ。」

これを聞くと二人は軽く頭を縦に振って部屋を出た。

そしてその時点から数ヶ月私は毎日会話にゆくりなれてゆき様々な質問を聞き、答えてもらった。ただ、自分にとって理解できなかったことは、その質問に答えてもらえる代わりに様々に実験に付き合わされたことである。その実験のほとんどは痛みを伴わないもので、私には目的が理解できないものがほとんどであつた。しかし、実験の意味を聞いても、まともな答えをもらえずにいた。

そして一年が過ぎた。今はA・E・318年だ。博士いわく、私は、

人として“完成”したらしいがよく意味はわからない。

「今日は、最後の実験の日だ。」

「はい」

ミノフスキー博士はそういつて私にひとつの本を渡した。その本の右上にはG M H U - M S P O O 1 “ブルーファイアーガンダム”と書いてあった。これが話に聞いた「モビルスーツ」という物が、と私は理解した。

「まずはこれを読んでくれ、後でこのMSに乗ってもらう。」

「わかりました」

その本にはそのMSのスペックや操作方法、使用上の注意点などきめ細かく書いてあった。この手の本を読みなれている私はその20ページ近くを5時間で読み上げた。それを読んだ限りで理解できたことは、まず、そのMSは普通の人間には到底扱えるものではないということ。パイロットにたくさんの細かい動作や調整を強制し、また、機体は操作に対し、非常に敏感に反応するように作られている。武装はどれも特殊だがすさまじい威力を誇るであろうものがあった。そして、読んだ感触として、まるでそのMSが自分のためだけに作られているのではないかと思わずにいらなかった。読み始めたのは昼過ぎで、博士に読み終わったことを報告したころには夜になっていた。

「博士、読み終わりました。」

博士の部屋に入って本をテーブルに置いた。

「そうか、お疲れ。MSのテストは宇宙で行うから、ついてきなさい。」

「宇宙ですか？それまたなぜ？」

「うむ、危険だからな。」

危険？何が危険だというのだ、運用テストに何の危険があるというのだ。だが、物心ついたところから（といっても一年位前だが）自分より知識のある人間としてみてきた博士の決定に逆らう気も、反論する気も無かった。博士はいつも正しいのだ、だから疑う必要はど

ここにも無い。

宇宙に行くにはさほど時間はかからなかった、戦争が終わって3年たつが、いまだに宇宙のコロニーと地球を行き来する艦体が多いからだ。そのほとんどは地球に移民する人たちと、宇宙に運ばれる資源だが、だからこそ多いといえる。私と博士は二人だけで宇宙に来た、博士の助手であるマコヴがないのには違和感を感じたが、博士が危険だといっていたことと何か関係があったと思った私はあまり考えないことにした。

そしてたどり着いたのは、MS製造工場とコロニーとコロニーの間地点の輸出艦補給地点として利用されるアストロイドから作られた巨大なコロニーであった。私たちはその中の通路を歩いていたのだ。

「ここからテストを行う、なおお前はMSに乗るのは今回が初めてだから念のため三人のMSがお前を付き添う。」

「わかりました。ところで博士、気になってしょうがないので聞きますが、私がMSに乗ることがなぜ危険なのですか？」

この質問に博士は深くうなずいて考え込んだ。しばらくして博士は答えた。

「・・・お前が乗るMSは不完全かも知れない、とでも言うておこつか。お前はMSに乗ったことないし、このMSも人に乗られたことが無い、言いたい事はわかるな？」

なるほど、と私は思った。運用されたことの無いMSなら、設計図に問題がある場合、運用されるまでわからないだろう。しかし、それならば私よりも3年前の戦争からのベテランパイロットに乗せたほうがいいのではないか？とも思ったが、やはり博士を信用する私の頭はやがて、わざとその疑問を忘れた。

「わかりました、気をつけます。」

「うむ。」

そして私たちはブルーファイアーが運ばれる倉庫にたどり着いた。ちょうどそれを持ってきたいた戦艦が到着しブルーファイアーを降ろす

ところであつた。基地につけられている、カタパルト装置を利用して立つた状態のまま基地のハンガーに運ばれた。その倉庫にあつた他のMSとは明らかに風格の違いを感じさせるデザインの機体であつた。名前のとおり全身の配色はスカイブルーと黒で他のMSよりふたまわり大きい、どこか気品すら感じさせるデザインだ。説明書でも読んだとおり、背中には右手にはエネルギーの出力を自由に調整することによって状況に合わせた使い方ができるビームライフル、通称“タクティカルBライフル”、高性能な機体に合わせて装備された高出力ビームサーベル、そしてブルーファイア最大の武器、スラスターと武器の両方の役目を果たすバックパックユニット、恐怖の策略“ファイアータクティクス”。

「・・・では早速乗ってくれ、ジャスティン」
「わかりました。」

私は乗った後、説明書で読んだとおりの起動の手順をはじめた。私はさらに通信器具も起動した。

「ジャスティン、異常はないか？」

「システムオールグリーン、異常なしです。」

「よし、では出撃してくれ。」

だがここで異変が生じた。異変というのはMSの問題ではなく、私自身が奇妙な感覚を感じ始めていた。表現をするならば、本能に支配される感覚だろうか、自分の体のコントロールが徐々に奪われる感じがしたのだ。カタパルトから発射して、宇宙空間に出たころには、目の前が赤くなっていた。そして、次に意識が戻っていたときには何も無かつた場所が漂う石と鉄の墓場と成り果てていた。

第二話

〈The Story of the Brave〉

〈The Story of the Brave〉

「ふう、一段落だな。」

そっついながらMSの実戦シュミレーターから一人の青年がパイロットスーツを脱ぎ始めながら降りる。

「おつかれさま！」

そっいつて彼の後ろから背の低めの女性が彼に話しかける。

「おう、おつかれ。」

パイロットヘルメットを外し顔をさらす。青年はみじかく黒い髪の毛をした、日系な見た目の男だった。

「今日も一段とうまくなつてたね！」

どこか間の抜けたしゃべり方をする人であった。

「まあな。でも、こんな世の中だ、戦う必要なんてのは当分無いだろうな！。戦争が終わって4年後にまた戦争なんて事は無いだろうからな。」

「何で急にそんなこと言うの？平和なほうがいいでしょ？」

「確かにな、でもな、政治的な問題とかすらない世の中だぜ？刺激

が足りないんだよ。」

「だからシュミレーターがあるんでしょ？」

彼の後ろから彼の横に移動して彼をまっすぐ見ている彼女に彼は見返した。

「それは、ちょっとちがうとおもっけだな。」

彼はあきれていた、だが彼女にはまったく飽きられている理由がわからなかった。

「それより早く昼飯にしようぜ、他のやつらはきつとすでに食堂だぜ？」

「そうだね。」

彼女はそう言っていると先に食堂に向かった。

「・・・やっぱり平和のほうがいいかな。戦争なんか起きたら、大切なもんがなくなっちゃうな。」

独り言であつたが、言い終わつたところには私服に着替え終わつていた。

時はA・E・319年。マルポークといわれる巨大アストロイドから作られた、MA製造施設が爆発事故で木っ端微塵になった時間から一年以上がたっていた。そして、この勇氣あるものの物語はある連邦軍士官学校に通う一人の男の物語。

彼は他の友人がすでにいた食堂にたどり着いた。食べ物もらい、友人たちと同じテーブルに座って食事を始めようとしていた時だった。食堂にある、ニュース番組を放送していたテレビから衝撃の映像が映し出された。

「えーそれでは現地にいるレポーターから緊急ニュースです、高木さん。」

「はい、私は今朝、正体不明のMS3機から襲撃を受けたというエーレルの町に来ています。見てください。専門家によると、この地面につけられている線状の破壊の後は、ビームによる衝撃ではなく高温で溶かされた後だそうです。実際、まだ少し暖かいです。これはどういった兵器によるもののかはまだわかっていませんが、こんなことができる武器はあまり多くないそうです。」

「はい。では高木さん、軍の対処はどうなっていたんですか？」

「はい、ですが。そのMSの目的はもとも軍のレーダー施設と兵士の訓練場だったらしく、軍はすぐにMSを出して対応したようなのですが、まったく歯が立たなかったらしいです。ですから、こんな大惨事になってしまったようです。彼らはいったい何者なのでしょうか？そして何が目的なのか？あいにく、レーダー施設の破壊により敵がどこに逃げたのかはまだわかっていません。すべてはまだ調査中です。」

「わかりました。現場から高木さんでした。」

その後も、ニュース番組は特集を続けたがさっきの映像で始まった会話によって誰も見てはいなかった。

「ユウ、今の見たか？」

ユウとは、今まで“彼”と称されていた男のことである。ユウの隣に座っていた男が話しかける。

「ああ・・・」

ユウの顔は青ざめていた。

「こんなことって・・・」

「でも、いったいなんでこんなことをする人がいるのかな？」

さっきユウと一緒にいた女性が心配そうに言う。

他の友達とは、彼らで関係はあるが別な話しをしていた。

「さあな、だが理由は探せばいくらかでも見つかるものさ。宗教、人種優越信、反社会的思想・・・など、な。」

ユウの隣に座っている男は、まるで他人ごとかのように話す。

「でも、四年前に戦争したばかりだよ？」

「そんなの関係ないさ。戦争は規則があって起きるものじゃない。戦争が起こるのを予想ができたり、早く終わらせたりはできるかもしれないが、戦争が起きること事態をとめるのは無理なのさ。」

ここで今まで黙っていたユウが口を開く。

「本当に戦争をとめることは不可能なのか？」

この質問に対して隣の友人は少し考えた。だがすぐに自分の意見を言うことができた。

「人の意思がある限り、戦争はとめることはできない、戦争は人の意思によって起きるものだからな。戦争を望む人間がいらないなんて嘘っぱちだね。」

ユウはそのまま難しい顔をしていたが、その友人はさらにしゃべり続けた。

「ま、でもこういうことが起こったときのために俺たちは鍛えてるわけだし、軍が新しいMSを作る理由だよ。戦争は止められなくても、俺たちの手で終わらせることはできるさ。」

「傲慢だなー」

「何だよ、リンはそう思わないのか？」

その友人が、さっきの女性、リンから批判を受ける。

「大きな軍の中のたったひとつの訓練場から出た兵士の何人かが、戦争を終わらせるができるという考えが、傲慢だといいたいだけだろ？」

ユウはリンの意見を説明してみせる。

「お前ら、もっと自分に自信持てよ。自分たちだけで戦争を終わらせる、それくらいの意気で行かないとだめだと俺は思ってるだけだ

よ。」

これにはリンもユウも真っ向から反対できるわけではなかった。

「・・・まあ、何はともあれだ。あそこを襲ったやつらの目的は訓練所を襲うことだったかもしれないし、ここはあそこからそんなに遠くは無いからな。用心したほうがいいだろう。」

ユウは言い残して食堂を去った。そして彼の言ったことをまるで上官たちも聞いたかのようにその日の残りは緊急事態の対処法の復習だった。その中でいつもユウが首を傾げそうになることがあった。それは、上官の許可なしではMSに乗ってはいけないということであつた。だから、たとえば訓練所が敵に襲われたとして、もし近くに上官がいなかったら正当防衛すらままならないということだった。これは、訓練生たちをシエルターに入れたほうが良いという考えから出るものだった。

結局それ以外、その日は何も無く、訓練生たちはみないつもどおりにその日の残りを過ごした。

ユウは一人、寮の部屋の別途の上で横になっていた。天井見ながら今日、ニュースで見たことを考えていた。歴史の教科書で学んだ様々なこと思い出していた。彼にとつてずっと何かが引っかかっていた。この敵の攻撃には何の前触れも無かった。普通、政府はテロ組織が形成された場合、それに気づいたちよつと後ぐらいにこういうことが起きる。だがそれよりも気になっていたことは・・・。

「いったいどうやってMSを手に入れたんだ？。今銀河でMSを作っているものは軍と運送会社やコロニー建設会社だ。そんな会社すらも軍の監視下で武器を持つMSを持つことを許可されていない。

とすれば可能性は二つしかない。テロ組織が自分で作ったか、軍から奪ったか。・・・だが、前者は軍によって厳密に守られているMS製造工場をのつとらない限りできないし、後者はそれよりも難しい。仮に奪えたとしても・・・。」

どうしても納得のいく答えを見つげずにいた。だが、かれこれ考えているうちに眠くなり、気がついたときには朝になっていた。

ユウは、いつものように着替え寮を出て朝の団体戦の練習シミュレーションに向かった。今日は久しぶりに訓練用のMSを実際に乗せてもらえる日であった。この訓練がユウの一番得意なものであった。その訓練をするための施設に入って列の中の自分の位置に入ると、上官といつもの挨拶があった。右側の壁には訓練用のMSが3機あり、左側のハンガーはひとつ開いていて、2機あった。その次の瞬間だった。右側のMS三つの爆発を起こす攻撃をされて集まっていた訓練生と上官は皆、ユウを含め、吹き飛ばされてしまった。だが最初に衝撃から立ち直ったのはユウだった。

「みんな！大丈夫か！？」

しかし、周りにいた訓練生と上官は反応しなかった。爆発から離れていた友人がいた。彼は機能食堂で隣に座っていた男だったが、足をやられ、立ち上がれずにいた。

「タカ！」

友人の名前を呼びながらユウは駆け寄る。

「俺なら大丈夫だ。足が言うことを利かないだけだ・・・。」

タカは強がっていたが足の怪我は結構ひどかった。どうやら衝撃で飛んだ壁のセメントの破片が足に当たったようだ。

「それよりもユウ、お前だけでも逃げろ・・・」

それを言われてタカは壊れた天井と壁から外を見回した。そらには見たこと無いMSと軍のMSの小隊が戦闘になっていた。確かにこの場合、ユウと足がまだ動かせるものは彼らだけでシエルターに逃げるはずだが・・・。

「だめだ、お前をおいていけない！」

「止める！やつらは俺たちを殺すことが目的だ！お前までやられたら相手の思いつぼだぞ！」

だがユウはすでにタカの体を持ち上げていた。そして、ユウは急いで一番近くのシエルターに彼を運ぶとその中で彼を降ろした。そこにはすでに、他の訓練生数人と、担当の上官が一人いた。そしてユウはタカをおろすとシエルターを出て行こうとした。

「おい、まて！どこに行くつもりだ。このシエルターを出てはいけない！」

ユウはその言葉を聞いて立ち止まった。

「俺なら大丈夫です。」

そっぴいながらユウはシエルターを出て行ったが、彼の背後に向けて上官は叫び続ける。

「おい！上官の命令に背くつもりか！？」

だがユウの耳には届かなかった。しかし、ユウもただ何も考えずにシエルターを出たわけではなかった。

「昨日のニュースによると、やつらが襲った訓練所に生存者はいなかった！もし、訓練生を殺すことが目的だったのなら、シエルターごと攻撃するつもりかもしれない！ならば黙って隠れてるよりは・・」

独り言であつたが、彼は考えながらMSの倉庫に向かった。たどりに着いたときにはもともと左側のハンガーにあつた二機はまだ無傷だった。空ではいまだ戦闘が行われていたが、味方の数が明らかに減つていた。

「こうなつたら！」

ユウは急いでMSに駆け寄り、はしごを上ってコクピットをあけ、中に入った。何度も訓練している機体だった為、起動にはまったく時間がかからなかったが、つい癖で通信器具もつけてしまった。

「ん？おい、このMSにのっているのは誰だ？」

ユウは仕方がなさそうに返事をする。

「ユウ・シライワ三等兵です。」

「何だと？訓練生じゃないか！出撃の許可はできない！」

「ごめんなさい、でもその命令だけは従えないんです。」

「・・・そうか、だが覚悟はしておけよ」

意外ないさぎよさにユウはびっくりしたが、そんな暇が無いことをMSのメインカメラによって思い出されると、すぐに出撃した。」

「ユウ・シライワ、出撃します！」

そういつて彼が乗っている新型の量産機「ウィフライ」のスラスタ―を最大出力で空に飛び出させた。一度空に出た後、その場所を維持するために出力を抑え敵を確認した。敵は三機いた。量産型らしい二機と、いまだき珍しい、ガンダムタイプが一機。量産機の一機とガンダムタイプはともに戦っていたが、もう一機の量産機は他の二機からはぐれていた。にもかかわらず、見方が二機、苦戦していたため、ユウはまずそっちを助けることにした。

ユウはビームライフルを撃ちながらその一気に接近した。他の味方に気を取られていたその敵はぎりぎりの時点でユウの攻撃に気づき、何とか回避したが、その隙に味方が近づきビームサーベルで敵のMSの胴体を真つ二つに切り裂き、撃破した。その仲間から通信が入る。

「ありがとう、おかげで助かった。とにかくあっちを助けよう。」

「了解！」

ユウはその味方の隊長らしき人に答える。よく見ると、味方は合計五人いるようだ。さっきの敵に苦戦していた味方に二機とガンダム

タイプともうひとつの量産機に苦戦している味方三人。しかし、その味方三人もユウたちがたどり着いたところには二人に減っていた。ガンダムタイプのビームサーベルが味方のMS一機の胴体を貫いたのだ。しかしこの二機もユウたちを期待していなかったのか、こっちに気づかずにはいたようであつた。

「よし、ビームライフル一斉発射！」

隊長の合図でユウを含む三人はビームライフルを撃ち始めた。一斉の攻撃に敵の量産機はよけきれず撃破されたが、ガンダムタイプのMSはまるで最初からわかつていたように軽々とよけて見せた。

「気をつける！あのガンダムは尋常じゃない！」

ガンダムとずっと戦っていた仲間から通信が入った。そしてユウが次に気づいたときは一瞬赤い線が五つ、ガンダムから伸びており、味方の二機にあたつてすぐ消えた後、二機とも爆発した。

「今のはなんだ！？」

その赤い線はいまだにガンダムから出ており、すばやく激しく動き回っていて当たるものを溶かしたり、爆破させていた。しかし、ガンダムのこの兵器をすでに味わっていた二人は何とかよけていた。

そしてガンダムタイプはその兵器をしまい。ビームサーベルを取り出し、ユウのほうへものすごい勢いで向かつていた。ユウも対抗してビームサーベルを出した。が、完全には間に合わずシールドでビームサーベルを防ぐしかなかった。ガンダムのビームサーベルは強力でウィフライのシールドにひどい傷をつけた。コクピットの画面にシールドの部分を赤く見せて「DANGER」の文字を点滅させ

ていた。これにすばやく反応してユウはシールドを切り離し、その場から離れて体制を立て直した。シールドは爆発はしなかったが、表面のほとんどがとけて、そのまま持っていたら腕後と解かされていただろう。しかし、しっかりと体勢を立て直す暇も無く敵はもう一度攻撃を仕掛けてくる。

ユウは今度はビームサーベルで敵の攻撃を防いだが、ガンダムの動きは非常にすばやく、次から次へと繰り出される攻撃はユウどころかウイフライには到底ついていけなかった。ユウは今までなぜ味方がガンダムから離れて戦闘をしていたのかを理解した。

「しぶといやつだな！貴様にかまっているほど私は暇ではない！」

敵が通信で話しかけてきたが反応するまもなく敵のガンダムはウイフライに蹴りを入れて吹き飛ばした。その反動にやられ、何もできずに落ちていくユウは一瞬絶望したが、味方の援護射撃が横から入り、ガンダムのシールドに命中させ、吹き飛ばした。そして仲間はそのままユウを助けるべく接近しながらビームライフルを撃ち続ける。

「運がよかったな。少し延びた寿命は自分がなぜ戦っているのかを確かめるために使っただな。」

敵がそう言い残すとすごい勢いで去っていった。ユウはあまり敵の言葉に気を止めてなかった。

「大丈夫か？」

仲間がこっちの状況を確かめるべく、通信を入れる。

「はい、シールドをやられましたが、異常は無いです。」

「よし、MSをハンガーに入れよう。」

「了解」

ユウともう一人の仲間は通信を入れてきた仲間に返事をする。

そして、ユウがMSを降りた後、とりあえず生き残ったものの救助を行い、破壊状況の確認などをした後、上官たちの数人はユウの所に集まってきた。

「君がユウ・シライワ三等兵だね？」

「はい」

「君がしでかしたことは命令違反であり、通常の対処に従わないものだ。場合しだいでは君は自分の命だけでは無く、仲間全員の命を危険にさらしていたことになる。・・・軽い罪ではないぞ？」

「承知です。覚悟の上での行動であります。」

少しの沈黙の後ユウは自分の本心を申し上げた。

「・・・だが、君のおかげで少なくとも二機のMSと二人の兵士が助かった。やつらの目的が、予想通りのものなら、君はここにいてすべての人間の命を救ったことにもなる。しかし、だからといって免罪をするわけにはいかない。ほかのものへの示しもあるからな。」

「分かりました。」

「君には明日から実践MSテスト部隊“ニューボーンズ”に編入することになった。この特殊部隊の存在は一応秘密だから君の仲間たちには別なことを伝えることになるが、いいかな？」

「了解です」

ユウはすんなり答えたが、顔色には不安がにじみ出ていた。

「よし、早速君の迎えはこっちに向かっている。今のうちに友達との別れを交わすといい。」

「分かりました、でもひとつだけ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「今回の戦いで何か分かったことってあるんですか？あの敵はいつたい何者なのです？」

これには上官たちは互い顔を合わせ、戸惑っていた。

「それはまだはつきりと分かっていない。しかし、敵の乗っていたMSは全部一年前に開発が終了した特殊な目的を持って作られた機体だとわかっている。あの量産機は敵のガンダムから開発されたファイアーという機体だ。あのガンダムはブルーファイアーガンダムという。開発目的などは軍の秘密情報であるため、教えられないが、両機とも特別な目的で作られたものだと言っておこう。敵が何者なのかは・・・まだ何も分かっていないが、私の聞いた話ではあのガンダムをあのよう扱える人物は限られているという。」

この情報はあまりユウにとって役に立つものではなかった。しかし、軍が何を判明したのかが分かる情報ではあった。ユウは上官が言ったとおりに、友達に別れをいいに言った。とはいっても、友達のほとんどは行方不明、タカは足の怪我で緊急車に乗って病院行き。唯一、大丈夫だった友達はリンであった。

「よう、リン」

「ユウ、聞いたわ。罰を受けるのね・・・」

「ああ、まあ仕方ないことだ。軽くしてもらえただけまだろ。しばらく会えないな。」

「うん。いつまでここにいられるの？」

「分からないけど、あまり長くはいられないらしい。自分の荷物を取りにいかないといけないからあまり長く話もできないな。」

「そうなんだ・・・元気でね。」

「ああ、お前もな。あと、みんなが無事かどうか分かったら、連絡してくれ。」

「うん、メールするね。」

そのとき、少しの沈黙、二人の間に訪れた。

「ユウまで死んだりしないでね。」

「おいおい、縁起でもない事言っなよ。大丈夫、俺は早々死ぬつも

りは無い。それよりも、お前は他の訓練生を、俺の分も助けてやってくれ。頼めるか？」

「・・・うん、まかせて！」

「よし、じゃあ俺、もう行くわ。また、いつかな」

「うん、またね。」

それが、少なくともしばらくの間は、最後の会話であつた。自分の振動でむちゃくちゃになっていた部屋に戻り、必要なものをバックパックとハンドバッグに入れるとすぐに部屋を出た。荷物は少なかったため、15分とかからなかったが、部屋を出たとき、さっきの上官がすでに部屋の外に出ていた。

「ユウ・シライワ二等兵、こちらだ」

「はい」

そういつて彼は訓練所内にある広場にユウを連れて行った。そこにはすでに巨大な戦艦が着陸しておりクルーが数人外に出ていた。

「ユウ君、気づいたと思うが君は二等兵に昇格された。テスト部隊とはいえ実戦を行うものに配置されたからな。それと、君にはもうひとつ言っておかなければならないことがある。君が“ニューボーン”に配置されることになった理由はもうひとつある。君はあの先頭で、自分の戦闘の優秀性、そして判断を下す際に必要とされる“何を優先するか”を考える能力を評価してのものだ。・・・彼らの期待を裏切らないように努力したまえ。」

「・・・ありがとうございます、そして了解です。自分にできる限りのことをするつもりです。」

「うむ、ではいけ。」

「はい。」

そう言ってユウは“ニューボーン”専用の戦艦“セイバー”に乗った。

第三話 〈The Story of The Wise〉

第三話

〈The Story of The Wise〉

時はさかのぼって、ユウの居た訓練所が襲われるちよつと前。一人の男が深夜、暗い部屋でパソコンに向かつてうつろな目をしてタイピングしている。男は作業をやめ、目と目の間の鼻の部分を強くつまむ。

「ふー、やっと終わったー」

そついい終わると男は帰るしたくをする。その男がいすから立ち上がる前に後ろから別な男が近寄って話しかける。

「おつかれ。明日には製作作業を始められそうかな？」

その男は前の戦争で戦ったダビデであつた。

「そうだな。問題は無かつたから大丈夫だろ。じゃあ俺はもう帰るわ。」

「そうか、じゃあ俺も帰るかな。」

パソコンに居た男はすでにその部屋のすぐ外にあるエレベーターに乗って一階に行つてその建物を出た。建物は軍の特殊MS工場とながつている、MS開発施設であつた。男がやっていた仕事は新型MSの為に行われた細かい計算の間違いが無いかの確認などを行つていた。

仕事で疲れていた男は家に帰ったあとすぐに寝てしまった。

次の朝は金曜日であった。週末の前の日であったが、彼にとって特別な日ではなかった。彼にとって休日とは不定期的に起こり、不定期的な長さがあるものであった。彼にはまだやらなければいけないことがいくつかあるが、実際、休日に近いことも事実で早く終わらせてしまいたいという気持ちも無かったとはいえないだろう。

仕事場に着くと早速、仕事仲間にあ拶された。

「おはようアキラ、昨日の夜はお疲れ。」

「おはよう」

アキラはまだ完全に目を覚ましているわけではないようだが、朝の挨拶はちゃんと返していた。早速開発チームが集まり、このシリーズのMSの開発を担当している上司が挨拶をした。

「皆さんおはよう。知つてのとおり、昨日の夜ついに開発の計画側が終わった、今日からは組立作業に移る。いつもどおりだが、しばらくはここが働くところになる。みんなはすでに会ったと思うが出来上がったMSの運用テストを伴う軍の特殊実戦テスト部隊“ニューボーンズ”の隊長、デビッド少尉が数日前からじきじきに見に来ている。彼は別にやることのできたので今日は来ていないが、いつもどおりになんばつてくれ！では、作業開始だ。」

スピーチが終わるとみんな、作業を始めた。最初はMSの部分部分をひつつ作るプロセスであった。ほとんどの作業は機械任せだが、だからこそ間違いが無いように見るのは大切なことであった。

アキラと他数人は一番大切ともいえる胴体の製作にかかわっていた。しかし製作は案外サクサクと進み、問題もあまり無かったため一週間で計画通りのMSが完成されていた。

出来上がった次の日、同じ上司とデビッドが着ていた。最初はその上司とデビッド話し合っていた。アキラは、わざとではないが、二人の会話を聞いてしまった。

「すまない、予定変更だ。新しいガンダムタイプを後二つ作ってもらわないといけない。これが軍の要求だ。」

そう言うときデビッドはその上司にファイルの入った封筒を渡した。それから更に会話をしていたが他のことに集中していたアキラには聞こえなかった。しばらくして上司とデビッドは開発チームを集めアナウンスメントをした。

「まずはじめに言わなければならないことは、この中から一人、この“ブレイブガンダム”専用メカニックアドバイザーを選んで、A社の代表として“ニューボーンズ”に編入してもらう。正確には軍に入るわけではないがブレイブのメンテナンスなどの仕方を“ニューボーンズ”のメカニックたちに伝授するまでいてもらうことになる。選ばれたのはアキラ、きみだ。」

このアナウンスにアキラは驚いた。しかし、考えてみれば当然の選択なのかもしれない。アキラはコクピットの設計を担当をしていたのでMSを操作する際に問題があった場合はどうすればいいかわかる可能性が高いし、開発チームのほかの人間は家族を持っているものが多く、ほとんどアキラより年上だ。

「・・・分かりました。」

「よろしい。それから明日はちゃんと仕事に来るように。」

そういつて解散した。上司はアキラのところに来た。

「悪いが軍も急いでいてな、今日中に迎えに来るそうだ。とりあえず家に帰ってしなくてはくれ。」

「はい。」

そしてアキラは上司のいったとおりにした。自宅に帰り、しばらくの遠出に備えて必要なものを集めた。準備が整った後、アキラは思い出したようにパソコンに向かい、知人たちにしばらくいなくなることを教えるメールを出した。そのメールを出すために「送信」を押した直後のことだった。ドアのベルが鳴った。アキラがドアに駆けつけて開けると、外には二人の軍服の男たちが立っていた。

「アキラさん、準備はできたかな？」

「はい、荷物を取りに行きます。」

そう言うときアキラは荷物を取りにまた家に入り、すぐに家を出た。外には車が待機しており、三人は車に乗ってしばらく走り続けた。町外れの平べったい草原に戦艦があり車は戦艦の中にそのまま入った。車が乗り込むと、戦艦はあまり待たずに出発した。

アキラと他の軍服の男たちは車を降りるとお互い挨拶をした。

「挨拶もせずにすまない、急いでいたものでな。俺はこの艦の専属メカニックのマサキだ。」

マサキと一緒にアキラを迎えに来た男も挨拶をする。

「俺はユウだ。よろしく」

アキラも同じく挨拶をする。

「ああ、しばらく世話になるな。俺はアキラ、よろしく。」

そう言うと、三人はブリッジに向かい館長にあった。館長は若く、あごにひげを生やした白人だった。

「お前がアキラか。俺はルークだ。名前が思い出せない場合は艦長って呼べ。かたっくるしい挨拶は抜きにして、よろしくな。ああ、それとこの戦艦の名前はレバレーションだ」

「ああ、よろしく。」

なんともいえない挨拶にアキラは戸惑ったが、むしろ緊張がほぐれた。

「さて、挨拶を交わしたところで、早速ハンガーに向かってもらおうか。」

そしてユウとマサキと一緒にハンガーに向かった。そこには何機ものMSを置くスペースがあったが二機しか置いてなかった。

そのうちの一機はブレイブで、もうひとつは見たことも無い新型の

ガンダムタイプであった。アキラが不思議そうな目でその二機目を見ているとマサキが説明した。

「ああ、あれはなここにいるユウが乗るエンジェルガンダムだ。まだ試作型で調整が必要だがユウとの組み合わせですでに予想以上の成果を出している。」

「そうか。ところでブレイブには誰が乗るんだ？」

「ああ、レメネスっていうやつなんだ。寝てばかりの変なやつさ。」

マサキがまた答える。

そう言うところとちょうど三人が入ってきたドアの奥から誰かが歩いてくる音がする。

「どうやら俺の話をしているようだな。」

レメネスと呼ばれる男が眠たそうな顔をしてドアにのっかかりながらこつちを見ている。明は彼を見たとき、不思議な感覚を思えた。

「お前が俺のブレイブに乗るパイロットか。」

「まあな、MSの名前のとおりの行動できる自信は無いがな。勇氣は俺の特徴じゃない。ま、勇氣のあるやつなんかすぐ死ぬやつのことだな。」

アキラは少し静かになって、むっとしていた。

「その名のとおりに行動はできなくても、開発者達が意味をこめてつけた名前を侮辱はしてほしくないものだな。」

「侮辱をしたつもりは無いが、ただの鉄の塊に感情を移す気も無いな。」

今にもけんかが始まりそうな雰囲気をマサキが変えようとする。

「お前らやめろよ。これから協力していかなければいけないのに。」

マサキのこの発言で場は沈黙した。だが、沈黙を破ったのはレメネスであった。

「俺が悪かった。最近はどうも俺は気が荒くてね。虫の居所が悪かった。」

「俺も悪かったな、まだお前がどんなやつかも知らないのに・・・」

ちょうどいいタイミングで館内放送になる。

「次の目的地が決まりました。これからサルマルジェ基地に向います。6時間の長旅になりますので、ゆっくり休んでください。」

サルマルジェとは元西カナダのあたりでそこにある基地に向かっていた。ちなみに章たちの現在地は日本の東北のほうで、日本列島をギラルマーと呼び、ユウが居た基地はギレルマー基地となる。

「サルマルジェか、何の変哲も無いところだな、いったいなんたつてあんなところに？」

アキラは頭をかしげながら言った。

「ああ、アキラは知られてないのか。ニュースで見たことあるだろ？軍事施設を襲撃する謎のMSの集団。サルマルジェは次の予想される敵の目的地なんだ。軍の上層部はまったく歯が立たない相手に、“目には目を、歯には歯を”の作戦に出たのさ。でもこっちは二対の新型ガンダムだ、敵は何者だろうと楽勝だね。」

マサキはアキラに説明をした。少し自慢げに話していたのは彼のメカニックとしての自信を見せていた。

「だいいいがな。俺は見たぜ、やつの戦うところを。あれは人がする動きじゃない。最もMSの性能だというやつも居るが、そうだったとしても何も変わらないな。敵が化け物であることにはな」

レメネスが怖がらせるような声で話す。彼は何か知っている風でもあった。

「しゃくだが俺もレメネスの言うことには共感だな。俺は実際に戦ったから分かる、MSの性能差はもちろんあったが、敵の動きは尋常じゃなかった。」

ユウもレメネスのいったことを証明するかのように話す。MSの操作の経験が一番豊富な二人が行っていることに、さすがのマサキも明るくするのは難しかった。

「でも、だからといって、二機のガンダム相手に勝てるわけではないでしょ？」

「さあな。だが、俺に言わせてもらえば、勝てる可能性は五分五分

つてところかな。もつとも、やつを倒せるのは俺たち二人が一番可能性が高いだろうがな。」

レメネスの意見は正直なものだった。彼には掴み辛い冷静さがあった。

「・・・ともかく、来る日に備えてみんな休んだほうがいい。それにレメネスと俺はシュミレーションをしなければならない。俺たちのチームワークはまだまだあげる必要があるからな。レメネスもブレイブに乗りなれないといけないしな。マサキ、悪いがアキラの部屋はお前が案内してやってくれ。」

「わかった。アキラ、こつちだ。」

マサキはそう言うと言ってきたドアに向かった。二人は廊下を歩きながら話していた。マサキにはどこか幼さが残ったようなところがあるが会話からたびたび彼独特の経験豊富さがにじみ出るところがあった。アキラの部屋の前で会話が終わる。

「ま、早く家に帰れたかったら、できる限り早く俺にブレイブの扱い方を伝授しないとな。何せ、取扱説明書を作る暇がないほど早く作らなければいけないかったんだからな。その割に完成度は高そうだけど。あ、ここが部屋ね。」

「ああ、だがどんな兵器も使わないと使えるかどうか分からないかな。ありがとうマサキ、またな」

「ああ、じゃあな。」

部屋に入るとアキラは荷物を一気に降ろす。部屋は決して広いとい

えないもので、小さな空間の中に様々なものが入っていた。部屋の地面の半分以上をベットが隠し、洗面台とクローゼットと壁に内蔵された時計があった。アキラは軽く荷物を出して、クローゼットの中に入るとベットのの上に横になった。柔らかいとはいえないベットだが、広さは十分あり体を広げる余裕はあった。

アキラは時計についてるアラームを4時間後にセットをし、しばらく睡眠をとることにした。

4時間後、アキラはアラームがなるちよつと前に目が覚め、ベットから起き上がり、なったアラームを消した後着替えた。アキラは部屋を出てブリッジに向かい館長に会った。ブリッジから見る外はすでに夜になっており、星が見えていた。

「こんばんわ、ルーク艦長。」

アキラはルークに挨拶をする。ルークも軽く首を上下に振った。

「まだ目的地まで一時間以上だ。今のところサルマルジェ基地からの連絡で襲われていないことがわかる。お前に言ったかどうか覚えてないが俺たちがそこに着く前にサルマルジェ基地が襲われる可能性が高い。場合によってはついたとたんに戦闘になる可能性もある。この調子だとそうなるかもしれないな。」

ルークは自分の知ってる情報を確かめるようにアキラに説明した。

「心の準備はしてくれ。」

アキラは少し驚いた表情であった。

「戦闘に巻き込まれることを知って俺をこの戦艦に乗せたのか？」

「そつだ、だが仕方のないことだ。ブレイブはガンダムタイプではあるが、その構造がいかに特殊かはお前が一番分かっているはずだ。」

アキラはこれを聞いたらうなずきながら外を眺めた。ブレイブはMS開発にとって革命的ともいえる新しい構造になっていた。それは昔のガンダムの設計を元に作られたものでこそはあるが、結果的にぜんぜん違うものになっていた。アキラはそれをよく知っていた。

ブレイブの構造の違いによる最大の特徴はデヴァインガンダムに使われていたBFGシステムを応用することで機体の装甲を薄くしてあらゆる攻撃に対して機体を守ることができる新技術のBAGシステムビームアーミージェネレーターを使うことで薄装甲と出力が高いジェネレーターおもち、小さいサイズの高性能機に出来上がっている。しかし、起動中はBAGシステムが常時ついているため長期運用を可能にするために武装は全MS基準のビームライフル、ビームサーベルとバルカンだけになっている。

「そつだな。」

アキラがこれを言った直後であった。レーダー担当の人が艦長に報告をする。

「ルーク艦長！敵MS反応が五つ、真つ先にこちらに向かってます！」

「何だと！？まずい、すぐにMS発進だ！後アキラ、念のためハンガーで待機してくれ」

「了解！」

アキラは急いでハンガーへと向かった。向かってる途中で放送が入る。

「敵のMSが五機こちらに向かっております。ガンダム二機、すぐに出撃してください！」

アキラがハンガーについたときにはブレイブはすでにカタパルトについていた。ブレイブの発進のすぐ後にエンジェルもカタパルトにつき発進した。あきらはハンガーにあった画面から戦いを見届けた。敵のMSの操縦術は非常に高く、二人とも苦戦していた。何よりも不利だったのは人数差によるもので後見方が二人居れば何とかなるかもしれないといったところだった。その状況を不安そうに見るアキラに、伝言を持った者があわてた様子で現れる。

「アキラ、MSは操縦できるか？」

伝言を届けて板のメカニツクのマサキであった。しかし、伝言を伝える前に質問を聞いてきた。

「まあ、戦闘用のMSは操縦したことはないが・・・作業用のものなら。」

「ああ、でもそれだけ経験あれば十分だよ。予備の量産機に俺と乗ってくれ！この戦艦は人手不足で困ってる、それにあれば予想以上に多い数の敵だ。あんたと俺が乗るしかない！」

予備の量産機は二機あったが、型が古く、両機とも特殊なものであった。ひとつは前の戦争で連邦軍の特攻部隊に使われていたことで

有名な「ウォーヴェンダス・ブレイド」とアーズガンダムの量産機である「アーズ」であった。

ウォーヴェンダス・ブレイドは実に単純な構造のMSであった。かなり簡略化されたMSに高い出力のスラスターをつけて、ほとんどの装甲を外し、ビームサーベルとガトリングガンを取り付けただけのものだった。そのため、非常に高い機動力を誇る代わりに、非常にもろいMSということになる。

アーズはその正反対とも言えるもので、装甲が重めで、スラスターは出力が弱めで、武器は狙撃用ビームライフル32とバックパックに二つの三連ミサイルランチャーがついている。近距離以外ならこのMSはどの距離でも戦えるようにつくられているため、機動力をあまり必要としなかった。

「おれがウォーヴェンダス・ブレイドに乗るからアキラはアーズに乗って後ろから護衛してくれ。」

「わ、分かった。」

アキラは声と顔に不安を見せていたが、マサキにもそれはあった。二人はMSに乗り込み、マサキから出撃した。マサキのMSはその高い機動力で、重力かでも浮遊を維持できたが、アキラの期待ではそれは無理なので、アキラは仕方なく戦艦の上に立っていた。

「よし、三連ロケットランチャーは二発しか撃てない、ビームライフルはエネルギーがある限り何発でもか……。ミサイルランチャーは慎重に使ったほうがいいな。」

状況は決しているものとはいえなかった。敵も見方も一機も撃墜さ

れてはいないがエンジェルとブレイブは突き放され、不利な状況に置かれていた。アキラにはマサキがたどり着くまでの時間稼ぎができなかった。最初の一発を操作に慣れていないため外してしまった。そのせいで敵は明の存在に気づき警戒し始めた。しかし、これにはこれの問題があった。アキラの存在の危険性を悟った敵の二機は、エンジェルとブレイブから隙を見てアキラのほうに向かった。さらにあまった一機はマサキに気づき、後ろからやられる前にマサキに切りかかり、ビームサーベルとビームサーベルの戦いになった。このため、近距離において無防備になるアキラを助けることができないMSはなく、狙撃用のビームサーベルと戦艦の威嚇射撃を敵は見事によけていた。

「くそ！こつちの考えてることが分かってるのか？いったいどうやってよけてるんだ？」

敵が近づきすぎていると感じたアキラは三連ミサイルランチャーを両方同時に発射したが敵の一人は軽くあしらい、もう一人はひとつ命中し深手を負ったが撃墜にはいたかなかった。深手を負った一機はもう一機と比べアキラの近くに居たため、打撃からひるんでいた敵をアキラはビームライフルで撃ち落とした。問題は打ち落としたところにはもう一機がビームサーベルを取り出しきりかかっていたことであった。しかし、アキラにとって運よくもその敵は後ろからエンジェルによって切り落とされた。アキラはエンジェルのユウに通信を入れる。

「悪い、俺がもつとしっかり狙っていれば……。」

「いや、慣れてないにしてはよくやってるよ、とにかく生きることだけに専念してくれ。」

ユウはそう言い残すと、他の二人を助けに戻った。どうやらアキラをタイミングよく助けられたのは、自分を止めていた一機を撃破できたためであつたようだ。一番近くに居たのはマサキの乗っていたブレイドだったため、彼を助けに向かった。エンジェルの助けがあつて、マサキは今まで苦労していた敵を撃破できた。問題はレメネスの乗っていたブレイドであつた。ユウとマサキは最高速度でレメネスの元に向かつていた、だがブレイドのシールドはすでに全く動きが鈍かった。ユウとアキラの頭の中にはすでに最悪の事態がよぎっていたが、アキラは狙撃用ビームライフルで見事敵を撃ちぬいた。だがレメネスの様子がおかしかった。レメネスが通信を使って非常を訴える。

「うわああああ！ひっ！ひっ！」

その後も奇妙なうめき声を出しつつ、ブレイドとともに落ちていった。

「くっ！マサキ、助けに行くぞ！」

エンジェルからユウがマサキに話しかける。マサキは了解するとエンジンジェルの後を追ってブレイドを助けに向かった。アキラは仕方なく、現状を艦長に報告した後帰艦した。

エンジェルとブレイドがブレイドをわきの下から持った状態でハンガーに入る。三機ともハンガーに取り付けた後、ユウとマサキはすぐにMSから降りたが、レメネスはブレイドに入ったままであつた。改めてみると、ブレイドには目立った傷が無数についていた。こげ後のようなものからへこみ等もあつた。仕方なく、ユウが外からコクピットをあげた。

「おい！こいつ気絶してるぜ！誰か手伝ってくれ。」

マサキは早速のMSの修理でいそがったのでアキラが手伝った。ユウの言うとおり、レメネスは気絶しており、体がずっしりと重かった。仕方がないので二人はそのまま医療室まで運び、戦艦にいた医師に見てもらった。

「命に別状はありません。気絶しているだけですから、このまま安静にしていればいいでしょう。」

「そうですか……。」

ユウが少し不安そうに返事をする。これから戦うというのに、レメネスがこのままではブレイブに乗ってもらう人が居ないということになる。二人はブリッジに行つてこのことを船長に報告した。

「そうか……。」

ルーク艦長は困った顔をしていた。そして、悩んでいた。敵は時間稼ぎだけではなく、送ってきた部隊で一人のパイロットを戦闘不能にまで追いやったのだ。ただでさえ勝てないかもしれない状況を実に勝てない状況にされてしまったのだ。もちろん予備のパイロットは居ない、ガンダムをともに操縦できるようになるにはそれなりの訓練が必要だからだ。

「このままでは撤退したほうがよさそうだな。何かいい方法はないものか……。」

撤退という言葉にユウはおよそ過激に反応した。

「何を言ってるんですかルーク艦長！撤退なんてできるわけないですよ！撤退するくらいなら俺一人で戦ってやる！」

ここで黙っていたアキラが口を開く。

「ブレイブに乗るパイロットが必要なら、俺ができるかもしれない。」

場は沈黙していた。そこに居た人たちの視線はすべてアキラに向けられていた。ルーク艦長が頭を抱える。

「いや、アキラお前はパイロットとしてのトレーニングを受けてない、それにさっきはうまく行ったかも知れないが今回は相手も違うし乗ってるMSも違う。何よりもお前が死んだら俺は責任が持てない。」

しかし、ユウは艦長と違う意見だった。

「いや、この戦艦に乗ってるもので一番あのMSを理解しているのはアキラだ。もしかしたらうまくいくかもしれない。いざとなれば逃げれば良い。」

「いや、ユウ。逃げたくても逃げられる相手じゃないことはお前が一番分かっているだろ。戦うからには相手が死ぬか俺たちが死ぬかそれしかない。・・・アキラ、本当に良いのか？本当にお前は戦いたいのか？もしお前が戦っていることがばれたら俺は軍法会議行きた。」

アキラは悩んだ。もともと彼は兵器を作る側のもので、扱うという

行為は想像出来るとしても、だからといって本当にブレイブのポテンシャルを十分に引き出せるかどうかは別だった。だが、彼には失うものも少なかった。

「俺はやる。ここで覚悟を決めないと、またやつらの好きになつてしまふ。俺はこの軍が正義だなんてことは言わないが、あいつらは止めなくてはならない。少なくともそう思つてゐる。」

「そうか・・・まあ、せいぜい気をつけてくれ。一時間以内に準備をしてくれ。」

アキラは少ない時間でできる限りのことをした。パイロットスーツに着替え、操作の確認をし、ユウから軽く戦闘時のアドバイスをもらった。そして警報が鳴った。アナウンスの音が響き渡る。

「MS部隊直ちに攻撃してください！防衛目的が攻撃されています！繰り返します、防衛目的が攻撃されています！」

メンテナンスが終わっていた二機、エンジェルとブレイブがすぐに攻撃をする。戦いはすでに近くの中で行われており、敵は一瞬では数え切れないほどの数がいた。それに対し見方は5機しか居なかった。察するに戦いが今始まったばかりではないようだが、被害はまだ少ない。

「アキラ、とりあえず俺の近くから離れるな。それと、あの青いガンダムに気をつけろ、あいつは一人で相手できるやつじゃない。」

二機のガンダムが戦場にたどり着き、敵を二機不意打ちによって撃破すると早速見方から通信が入った。

「助けてくれてありがとう！あと少し遅れていたら私たちは皆殺しだった！」

その通信を送ってきた機体を後ろから切りかかろうとしていた敵機の攻撃をユウは受け止め通信に答えた。

「そういうことは無事に生き延びてから言え！まだ戦いが終わったわけじゃないんだからな！」

状況は決して良いものではなかった。あらゆる方向から様々攻撃が来ており、全機身を守るだけで精一杯だった。

「うわあああ！」

見方一機が攻撃を防ぎきれず断末魔の悲鳴を上げる。

「くそ！このままじゃ埒が明かない！」

アキラが仲間の撃破に反応して言う。そこでここぞとばかりに援護射撃が入る。

「お前ら動くなよ！」

ルーク艦長からの通信であった。援護射撃をくれたのはアキラ達が乗っていた戦艦、レバレーシオンだった。作戦としてはレバレーシオンは敵の危険性から戦いにかかわるはずではなかったが、ルークはどうやら居てもたつても居られなかったようだ。援護射撃によって敵は数機撃破され、敵はアキラ達に近づくことを恐れた。この隙をついて章たちは戦艦のほうに逃げ、戦艦を守るように前を飛んでいた。その後に起きた戦いはしばらく長引いたが、ブルーファイアーは後ろから戦いを見ているだけで何もなかった。まるで攻撃のチ

ヤンスをうかがっていたかのようであった。ブレイブとエンジェルの活躍もあり、敵の数が残り5機ぐらいになった瞬間のことだった。ブルーファイアーはファイータクティクスを使って、仲間ごとアキラたちの見方のMSたちを破壊した。その後、ファイータクティクスを戻すと、アキラ達に通信を入れてきた。

「そっちの翼がついたガンダムに乗っているのはこの前見逃したやつだな……。察するにあれから覚えたものは恐怖ではなく復習心のようなな。」

「復讐心じゃない、俺がお前を止めるのは勇気だ！」

「どっちも似たようなものだ。問題はお前だな。お前は何者だ？見たことのない戦い方をする、どこか素人じみてるが。どっちにしろ、殺すのは惜しい……。ん？」

ここで両者にとって思いがけない事態が発生した。彼らの横から二つのMSが急接近してきたのだ。それも見たことのないタイプのMSだった。ひとつは黒く、ファイータクティクスに似た兵器を背中につけ、もうひとつは赤く巨大なビームブレイドを両手に持っていた。その二機はアキラたちとブルーファイアーの両方に無差別攻撃を始めた。

「なんだこいつらは!？」

アキラがユウに思わず聞いてみる。

「しるか!だがこいつらできるぜ!」

ルークから通信が入る。

「お前らとりあえず逃げろ！本戦艦も一時撤退をする！」

するとその二つの未確認MSはアキラたちへの攻撃をやめ、ブルーファイアーへの攻撃に集中した。ブルーファイアーはこの二人の攻撃に耐え切れず、全速で逃げた。二機は戸惑うかのようにアキラ達のほうに機体を向けたが、しばらくすると、アキラ達を放って置いてブルーファイアーを追った。

章たちはいったん帰還し、ハンガーでルークにあった。

「よく無事に戻った。予想外のことが起きた上に、目的の敵MSに逃げられたが、防衛目的が守れたので作戦は成功だ。これから離陸する、ブリッジに戻ってすぐに椅子に座ってくれ。」

二人はうなずいた後、ルークの後をついてブリッジに着いた。着陸した後、彼らはその訓練所の代表にあった。

「ルーク艦長、良く間に合ってくれた。あと少し遅れていたらここに居た者たちは死んでいたであろう。」

「いえ、部下を助けることができず、申し訳ありませんでした。」

「・・・彼らの命は無駄ではなかったし、君のせいではない。気にするな。それより、私たちは話すことがたくさんある。どうぞこちらへ。」

そうして二人は会議室に入った。アキラとユウとマサキは会議室の外で待っていた。

「・・・ちつくしう。」

ユウは悔しそうに天井を眺めていた。こぶしを強く握り、壁によっ
かかっていた。アキラもドアを挟んでユウの隣で壁によっかかっ
ていたが彼は下を向いていた。冷静な二人を差し置いてマサキは忙し
そうにあたりを見ていた。

「ずいぶん長い間話してるね。」

マサキは暇そうに静かな二人に話しかける。

「会議っていうの長いもんだろ。」

アキラもなんとなく話し返す。

「それにしても、あのほかのMS二機はなんだったんだろうね。戦
いの邪魔してきてさ。まるで戦いをとめるためだけに入ってきたよ
うなもんだったけど。」

「・・・たしかにな。見慣れた感じのMSじゃなかったしな。」

「それはそうだろうね。アキラは戦闘用のMSを作ってたからね。」

「それはどういう意味だ？マサキ。」

「あのMS二機の肩に書いてあった形式番号、作業用のMSのもの
だったよ。だからこれは俺の推測だけど、あの二機は徹底的にカス
タマイズされた作業用MSに武器を持たせたものなんだと思う。あ
と、色も変られてるかな？普通作業用っていうのは派手な色はつ
けないものだからね。」

「なるほど……。ってことはあの二機に乗っていたのは間違いなく民間人か。」

「多分そうだろうね。大金持ちの民間人だろうね。MSの出所は分からないけど、少なくとも軍の量産機は軽く上回る性能が出るところまで改造されてるところを見ると相当なお金がないとできないだろうから。」

「そうだな。」

ちょうどその後に会議室のドアは開き、ルークから彼らに指令が下った。

「次の行き先が決まった。行くぞお前ら。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1397d/>

Gundam Divine 第二部 Adams Children

2010年10月10日23時58分発行